

二種の支配者

森 本 治 吉

(一)

書紀神代卷の国譲りの神話の中に、高天原の高皇靈神と大國主命との間に、國を譲つた後の大國主命の位置待遇に關して次のやうな問答が行はれてゐる。高皇靈神曰く、

「今汝が言す事を聞くに、深くその理あり。故また条々まじまじにして勅したまはく、そも汝が治らす顕露あらはの事、宜よろこは吾が孫治らしなむ。汝は神の事を知らせ」

これに対して大國主命は贊成の意を答へてゐる。

「吾が治らす顕露あらはの事は、皇孫治らし給へ。吾は退りて幽かりたることを治らさむ」

かう答へて、八坂瓊やまぎはらの玉を披かうて（玉を御神体として残して）、永久に此の顯界から身を隠してしまつた。

この神話の内容は、一種の契約を結んだのである。それによると、出雲民族の占めてゐた土地は政治的には高天原の神達かみが支配するが、精神的な面或は宗教的な面は大國主命が支配すると言ふ約束である。つまり古代日本を安泰ならしめ更

に積極的に發展させる為には二種の支配者が必要であつた事を示してゐる。

実はこれと似た事柄は、皇孫系の内部でも崇神天皇の時に起つてゐる。それは、これまで皇居の中に置かれてゐた天照大神と、大和国の土地神、倭の大國魂の二神を皇居の外に移してゐる。天照大神は倭の笠縫かさぬいの邑むらにまつり（齊主は、豊鍬入姫命）、大國魂神は別地にまつつてゐる。（齊主は、淳名城入姫。齊地を記さないが現在の大倭神社の所在地でまつつたのであらう）共に齊主が女性であることに注意を引かれる。

さてこの場合は實際政治の上で国民を支配することは天皇が行ひ、精神的な支配は天照大神に任せる事になつたと解釈すべきである。

この二種類の支配が必要だといふ事は、どの民族でも社会が未発達みだつたの段階では、世界中で行はれたところである。近代國家で宗教の勢力が薄れた為、各国に於いてこの二勢力が相並んで国民に臨むといふ状態は見る事が出来なくなつたが、それでも英国やイタリヤでは現在も宗教的勢力が相当の

勢威をふるつてゐる。即ち現英国女王の妹が妻を離婚した男子を夫として選ばうとするのに英国の教会が反対した為、王妹の恋は破れてしまつた。イタリアの第二次大戦後の或期間に左翼の勢力がイタリアの半島全部に延びた最中に行はれた総選挙で、左翼の勝利が予想された際ヴァチカンの法王庁がこれに反対して立ち、左翼に投票したものは教会から破門すると威嚇した為、左翼の勢力が敗北した事は顕著な事実である。これらから想像して、神々の強力だつた古代社会では、寧ろ王権を凌ぐ程の勢力を持つた宗教勢力が存在した事を信じてはならない。それは現在でも南太平洋やアフリカの社会で酋長に対する神官（又は呪術師又は魔法使ひ）といふ二勢力の対立が、そのまま保存されてゐる事に注目すべきである。

(二)

ところで興味ある事實は、日本の場合それが男性・女性といふ性の差別によつて二つの勢力の支配が代表されてゐるといふ事實がある。

上記の二例のうち、大国王の場合には、幽・顕二勢力は共に男性であるが、崇神天皇の例では、幽権は女性。顕権は男性である。かういふ男女別の最も古い記録は魏志の倭人伝に、女王国の事を記す一条である。

「其の國、本亦男子を以て王と爲し、住まること七、八

十年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王と爲す。名づけて卑彌呼と曰ふ。鬼道に事へ、能く衆を惑はす。年已に長大なるも、夫婿無し。男弟有り、佐けて國を治む。王と爲りしより以来、見る有る者少く、婢千人を以て自ら侍せしむ。唯々男子一人有り。飲食を給し、辭を伝へ、居処に入らず。」

ここでは明らかに女王と記すから政治上の権力は女王が握つてゐたかに思はれる。そしてそのほかに鬼道、即ち宗教的な呪術も行つたと考へられる。ところが次に女王の弟のことが書かれてゐる。そしてこの事によつて、どうも弟が、實際の政治の事務を掌つてゐたと思はれる。すると女王は名目は女王だが實際は政治上の事は副業で、宗教的な事が彼女獨特の行爲であつたと考へられるのである。

何故かなら、日本の古代には女の巫女を中心とするシャーマン教が行はれてゐた事が種々の材料から推察されるからである。

その中でも顕著なものは周知のやうに、天の石屋戸隠れの神話で石屋戸の前で舞踏した、天宇受売命の存在である。この時、天宇受売命は神憑り的な舞踊を行ひ、又半神半人の熱狂状態をあらはしたのであるが、この舞踊神事を援助する者として布刀玉命と天兒屋命とが登場してゐる。前者は神々が天照大御神に捧げる各種の物品、即ちこの祭に必要な祭具を捧げ持つ役である。後者はこれ又この祭に必要な祝詞を奏上

する役目で、この祝詞によつて祭の趣旨がわかり、自分達の最高の神に訴へる気持が表現されたのに違ひない。だがこの二者は共にアツシスタントであつて中心はどこまでも舞踊する巫女である。これは朝鮮や満洲に現存してゐるシャーマン教を、昭和の初年に鳥居竜造博士が調査して明らかにされたところで、その地では、巫女一が祭祀の中心で、一人或は数人の男の助手がこれを助けて働く由である。

天の岩戸の場合もこれと同型である。中心となる巫女一人と男の助手二人が居てこの祭が成立して居り、その点朝鮮、満洲のシャーマン教と同型である。これまでも、岩戸の前で踊る天宇受売がシャーマン的だといふことに、言及された研究者もあるが、助手の点は全然見落されてゐた憾みがある。

更に、この神事を古語拾遺に記したのものによると、この時、天宇受売命は笹その他のものを手に持つてゐたが、同時に鐺（たが）を著けた矛（やぶ）を持つて俳優（なまこ）をなしたとある。これだと單純なダンスにとどまらず何か意味のある所作をまじへて芝居らしい事をやつたと解釈される。ところでそのサナキと言ふのは鈴の一種である。鈴は元來邪魔を祓ふ力を持つと考へられた。現在田舎に残るミコや各神社の祭などで鈴を使ふ事は極めて多い。外国のシャーマンも鈴を使ふのであつて、この古語拾遺の記事は天宇受売命がシャーマン教に近かつた事の一資料となるものではあるまいか。

(三)

ところがかういふ女の巫者の例はひとり記紀や古語拾遺に止らず、万葉集の中にも現れてゐる。この事は「白路（昭和三十一年五月号）」に「日本のシャーマン教に就いて」と題した拙稿の中に自説を掲げておいたのだが、先づ、坂上郎女の例がある。

大伴坂上郎女、祭神歌

ひさかたの 天の原より 生れ来る 神の命 奥山の
賢木の枝に 白香（か）附く 木綿取り附けて 齊（みこ）ひ瓶をい
はひ掘り据ゑ 竹玉を 繁（むら）に貫（ぬ）き垂り 鹿（しか）猪（いの）じもの 膝
折り伏せ 手弱女の 襲衣（きよ）取り懸け かくだにも 吾は
祈（いの）ひなむ 君に逢はじかも 3三七九

(短歌省略)

右の歌は、天平五年冬十一月、大伴氏の神を供祭する時、いささか此の歌を作る。故、祭神歌といふ。

大伴一族の祖先神を祭る祭が行はれ、その神に坂上郎女が祈つた歌だが、この歌の趣きでは、襲衣（上から着用する衣服）をかぶつて膝まづき祈る坂上郎女が、祭の中心的位置に在つて巫女的性格を帯びてゐる。ただに齊主が女性であるのみならず、その服飾や賢木（即ち常緑樹）に祭の用具を結び垂れるといふやり方が、天の岩戸の例とよく似てゐるので、シャーマンの色彩の漂つてゐることを感ずるのである。

石田王の亡くなつた時、丹生王〔王〕とあるが女性である（の詠んだ長歌（三四二〇）も、作者が齊主となつて、竹玉を懸け、菅を持つて祈るといふ内容である。更に、遣唐使の母がその子の旅の安全を祈る歌（九一七九〇）や、新穀の收穫を祝福して田の神を祈る新嘗の夜の歌（一四三三八六・三四六〇）も、女性が齊主となつてゐる。

而して、右の坂上郎女以下の齊主は、皆平素は普通の家庭女子として暮してをり、それが祭の時だけ巫女になつたものである。これは天宇受売命のやうな職業的巫女と対立するアマチュア一巫女であるが、この方が発生的には古いといふことを、鳥居竜造博士がシベリア及び東亜各地のシャーマン教を比較調査された「日本周圍民族の原始宗教」の中で述べて居られる。古代日本の場合もさう見るべきである。

なほ神功皇后が、仲哀天皇が琴をひきながら急に薨去されたあとを受けて朝鮮征伐を行ふに当り、一々神の意志を問ひ神の命令のままに行つて成功してゐる。その時も神功皇后の位置や行為はまことに巫女的である。そして倭人伝に女王ヒミコは鬼道を行つたと記すが、これは神功皇后の史実とよく適合してゐる。かういふ時、女性の支配者が神の意志を問ふ場合には、「支配者で同時に巫女」といふ位置に立つたもので、その時その女子は恐らくは神憑りの祈り方を行つたものと推察される。

(四)

ところで元に戻つて、この様に宗教的支配者と政治的支配者と二種類あつた事を白鳥博士が既に説いて居られる由である。岩波文庫の「倭人伝」の註記に引用された小文によると、博士の意見はヒミコと男弟との關係は、「天照大神」対「天兒屋根命・建御雷神」。「神功皇后」対「武内宿禰」。「推古天皇」対「聖德太子」。「齊明天皇」対「中大兄皇子」の關係と同じだらうといふのである。

これは、勝れた觀察であつて、これが古代の実状であつたと思はれる。尙これを補つて言へば、天照大神の対立者としては、出雲民族征服を画策した「高御産巢日神・高木神」を挙ぐべきであらう。「天兒屋根命・建御雷神」は対立者に非ずして「従属者（従属的実務執行者）」に過ぎない。又、万葉時代に女帝持統天皇を助けて、草壁皇子が「日並皇子（ひなしのみこ）摂政の宮、といつた称呼」として政治を執られたのも、右記の一連の対立者と同様だと思はれる。

繪じて天皇が女性である場合は、かういふ政治上の助力者が出てゐる。このことは、女の天皇が政治上の能力が乏しい。その為助力者が出たのだと、これまでは見なされて来た。白鳥博士も恐らくさう見られたのではあるまいか？ しかし、これには別の見方を立てても良いやうである。

といふのは、前記の様に日本では女性が祭を執行するとい

ふ事が、神話以来連続して万葉期まで行はれてゐる。のみならず外国の記録たる倭人伝でもそれを明記してゐる。それだから、女の政治支配者が居るのに男子の助力者が出たのは、さういふ女性は唯有名無実的存在で、殆ど役に立たなかつたのだと思はれ易いが、この考は誤といふことになる。

これを誤と見る理由は、女性は宗教的に高い能力を備へてゐたとすれば、女帝の位置は決して低く評価してはならない。現代の研究者は古代社会の宗教の勢力を見落しがちだが、女帝の場合も女の方が神に近い存在であり、神を祭るに男子とは比べものにならぬ勢能を持つてゐたとすれば、女帝こそ治国平天下の為には必要だつたのである。

女性は政治的には有能でなかつたか知れぬが、政治は女王としては副業である。本業は神に仕へる事である。祭を完全に遂行する事である。この幽冥界の祭が完全であれば神々の満足を得られる。さうすると満足した神は或は豊作をもたらし或は病を鎮圧し或は政治が円滑に進む様に助けて下さる。一体が神力は人間の力などとは比べられぬ程に強力なのが古代社会だから、この靈界の援助さへ完全有能であれば、人間の政治的支配者の与へるものより、何十倍の幸福が民衆の上に約束される訳である。かくて女の天子は、仮に政治的に無能であつたにしても、たとへ政治的には何もせずして遊び暮してゐたとしても、尙且つその位置は貴重であり、その働きは必要欠くべからざるものであつたのである。(中央大学教授)

犬養 孝 著

萬葉の風土

A5カバ―装 上製
定価 五〇円 四四円

風土はすべての胚胎である。萬葉に親しみ萬葉の土地に触れば触れる程、萬葉美の造型がつねに風土とともにある実相を知るのである。

— 内 容 —

秋山われは―浦の浜木綿―続浦の浜木綿―人麻呂と赤人―高市黒人―筑前国志賀白水郎歌論―赤人の不尽山歌の構成―赤人の地名表現―地名表現よりみたる笠金村―水田耕作歌私鈔―島のしただみ―続島のしただみ―因幡の雪―上代文学と風土―萬葉集における地名―萬葉地理(時代性・作家性・風土性)

久松 潜一 監修	要説 日本文学史	A5判 辛	四四
"	概説現代日本文学史	A5判 辛	三六
風巻景次郎 著	新古今時代	A5判 辛	九〇
"	日本文学史の周辺	A5判 辛	三〇
"	日本文学新史	A5判 辛	三〇
"	編 日本文学新史	A5判 辛	三〇

圖書目録呈

東京都文京区春木町二―二三
振替東京八七八二番 堉書房